



島々の慟哭が聞こえますか。

■日本・ロシア合作ドキュメンタリー映画

# アイランズ/島々



- プロデューサー：安山淳夫／相澤徹／セシオンD.アラノヴィッチ
- 監督：セシオンD.アラノヴィッチ／大塚汎 ●撮影：大津幸四郎／セルゲイ アスターホフ
- 音楽：オレグ カラヴァイチューク／アレクサンドル クナイフェ
- 製作：株式会社 新映像／株式会社 フィルム・クレセント (TEL.03-3400-8801)  
キノドキュメント アソシエーション・レンフィルム
- 1993年／日本・ロシア合作ドキュメンタリー映画／カラーフィルム／95分



## アラノヴィッチ監督が、日本スタッフと手を組んだ 新作ドキュメンタリー。

「私はスターリンのボディガードだった」「海に出た夏の旅など、セミヨンD. アラノヴィッチ監督の作品は、昨年わが国で初公開され大きな反響を呼んだが、外国ではすでにその卓越したリアリズム手法で早くから注目されていた。《アイランズ/島々》は同監督初の日本・ロシア合作による最新作である。この企画は昨年6月、アラノヴィッチ監督の呼びかけに安山淳美プロデューサーが応じたことから始まり、ロシア側が4島の現島民、日本側が北海道在住の元島民を撮ることが決った。日本側メインスタッフはロシアとの合作経験のある大塚汎監督と、ドキュメンタリーならこの人といわれる大津幸四郎カメラマン。舞台は北方4島。主役は日本人元島民とロシア人現島民。この島々をめぐる人びとの生活を、心を探るのが映画の主要な目的である。ナレーション抜きで、当事者が自らの運命を語る。歴史に埋もれた事実、意外な真実が明るみにされるにつれ、領土問題の本質が深く抉り出されていく。

## 映画タイトル《アイランズ/島々》は 最初、暗号名だった。

ロシアでは、コピー機やファクシミリの普及が著しく遅れている。それは、高度な軍事、宇宙技術に比べて民生技術の立ち遅れと考えられがちであるが、そればかりではない。独裁権力は例外なく情報の公開を恐れ、内密の通信や出版等を嫌う。コピー機やファクシミリは、情報の公開や通信の有効な手段となり得ると見なされ、その普及を制限されていたのである。自由になった今も急には変わらない。ファクシミリの通信文も早くて翌日、遅いときは3〜4日後に入ってくる。その間、誰の目に触れるかもわからないので「北方領土」とか「北方4島」と書く訳にいかず「アイランズ」としたのが、その後の協議で、正式タイトルになった。ロシア名は同意語の「オーストロヴァ」である。

## 気象の変化などによる撮影の難航と、 エリツイン大統領の訪日中止。

くるくる変わる北方4島の気象と、想像を絶する不自由な島々との交通、通信手段(これは映画の中

# 歴史の翳の部分に綴り込まれた 名もなき人びとのヒューマンドキュメント。

での大きなテーマのひとつとなっている)………  
こうしたいくつかの問題により、当初の予定より大幅に遅れて北方4島での撮影は1992年9月開始された。

しかし、それより前、もっと大きな異変は起きていた。エリツイン大統領の訪日中止である。当然打合せの席で話題になった。両国スタッフの共通認識としては、「訪日中止によって、この映画の重要性が増しこそすれ、減ることはない」ということであつたが、世間一般はそうはいかなかった。日本人スタッフがハバロフスクから出国する時、従来では考えられないほどの厳重チェックを受けたり、日本国内の空気も一変し、支持してくれていた人々は(企業も含めて)一斉に後を向いてしまった。だが、もう後戻りはできない。日ロスタッフの努力により、苦難の日々を乗り越えて完成をみたのである。

## 映画の内容

映画は、昭和篇と平成篇に分けられており、昭和篇は元島民だった日本人の、4島における様々な思い出や体験が語られつつ、当時のニュースフィルムが映しだされる。4島から引揚げさせられる敗戦国日本の島民たち、戦勝国ソ連の入植者たち………現在の4島には「勝利の広場」があり、そこには、元来ロシア領だったこの地を戦艦により奪還したという文字が刻まれている。元島民たちは異口同音に「あのとき戦闘はなかった」と語る。ソ連軍の上陸はまったくの予想外のことだった。昭和23年、日本人全島民は樺太経由で日本へ送還されることになり、樺太では日本船を待つ間に、多くの子供や老人が死んでいった。それでも長い年月のちに元島民と現島民の間に交流が芽生え始め、日本人墓地を守ってくれる色丹の小中学生たちも現れた。「千島列島の先住民はアイヌ民族である。」というスーパーが印象的である。

映画の後半・平成篇は、現島民・ロシア人たちが島での生活、入植した当初のことなどを語り始める。通信、交通手段の未整備、立ち遅れ、経済的困窮、本音で語る彼らの島の現実には予想以上に厳しいものがある。島へ渡る交通手段の悪さにより夫の死に目に間に合わなかった船員の妻、ピザなし渡航団に加えてもらえず日本人の招待が受けられない元漁師、満足な高等教育を受けるには島から出るしかないと言息をつく少年の両親……前半での元島民・日本人は、辛い思い出もしいに風化し、淡々とした口調で語るのに対し、現島民・ロシア人たちの、絶望的なまでの現実に対する本音の吐露には少なからず驚かされる。ピザなし渡航の日本人たちが帰ってゆくのを見送るロシア人たち、そしてロシア人漁師の住む家の庭にある日本人の墓石——映画は見る人それぞれに、様々な問いかけを与えてラストを迎える。



## ライブラリー向けDVD販売開始!

★上映会用フィルム(16mm/35mm)、その他デジタルメディアの貸し出しも受け付けております。

## 《お問い合わせ》

株式会社 フィルム・クレセント

TEL/03-3400-8801 FAX/03-3406-7928

E-mail/film.cst@themis.ocn.ne.jp